

「PBL」の実践

前号で紹介したとおり、幸手市では、令和四年度の重点的な取組として「PBL」の実践を掲げています。「PBL」とは、「Project Based Learning」の略称で、「課題解決型学習」を意味します。他者の要望や自身の願望に基づき、何をしていくか(課題)を設定し、期限内にその目標の達成や理想の実現(解決)を目指す活動を通じて、「未来を切り拓く力」を身に付ける社会に開かれた探究的な学び(学習)を行っていきます。

一学期に入り、各校では、総合的な学習の時間を中心に「PBL」の実践が進んでいますが、今回は幸手市立さかえ小学校に訪問し、取組を参観したときの様子について紹介していきます。

さかえ小における「PBL」

幸手市立さかえ小学校(校長 中沢朋宏)では、児童が自ら「問い」を立て、「課題」を解決していく学びの過程を大切にしている様子が見られました。

参観したのは三年生の教室。テーマは、「私たちの住む幸手市、栄地区」でした。



テーマは一つですが、児童が立てた「問い」やその「解決方法」は実に多様でした。いくつか紹介します。

- ・「幸手駅にはどんな工夫があるのだろう。」  
↓資料で調べる。実際に駅に行つて調べる。駅員さんにインタビューする。
- ・「市内のある地域では、わらで作られた大蛇がまつられている。なぜだろう。」  
↓作つた方々に聞いてみる。
- ・「幸手市のマークにはどんな意味があるのだろう。」  
↓市のHPで調べる。市の秘書課職員にインタビューしてみる。
- ・「幸手のオリジナルのお菓子はどんなものがあるのだろう。」  
↓夏休みに和菓子屋さんに行き、実際に食べたり、お店の方に聞いたりしてみる。  
etc...

「解決方法」だけでなく、他者に伝えるための「表現方法」も多様です。例えば、タブレット端末でスライドショーを作成する(これが一番多かった)、本にまとめる、新聞にまとめるといった表現方法が見られました。担任の先生にインタビューしたところ、大きなテーマは提示しつつも、各自の「問い」や「解決方法」、「表現方法」は児童の自主性に任せたとのことでした。

更にインタビューを進めると、あるエピソードを聞くことができました。児童が始めはインターネット検索で調べ学習をしていたのですが、「書いてある内容が難しい」、「誰か詳しい人に聞きたい」といった「困り感」や「願い」が出てきたそうです。担任の先生は、その願いを受け、市役所職員等にゲストティーチャーの依頼をしたというのです。中には、「毎年〇年生は△△をゲストティーチャーとして依頼する」といった、慣例化・形骸化された総合的な学習の時間も見られますが、このように子供の意欲や目的に沿った学びの進め方が、本来の姿なのではないでしょうか。

「PBL」の更なる充実を

一連の学習を参観して感じたことは、「子供たちの目の輝き」と「内容をきちんと語れる姿」です。自らの知的好奇心に基づいて進めている学びであるため、全員が能動的に活動し、「これはどういうこと?」「こちらが質問すると、各自が知った多くのことを、澁みなく語ってくれました。(ある男子児童は、スライドショーを使って、即席講座を開いてくれました。)

このように、子供たちが、「気になる!」「知りたい!」「伝えたい!」という思いをもつて学んだ経験は、今後、児童生徒が美生活・実社会で生きて働く力、すなわち未来を切り拓く力の育成に大きく関わってくると思えます。

幸手市では引き続き、「PBL」を各校で確実に実践していただけるよう、研修や体制の充実を努めていきたいと考えております。

音読学習のAI化

さかえ小学校に訪問した際、興味深い取組がありましたので、紹介します。それは、「音読学習のAI化」です。家庭学習として「音読」の宿題が課されることは、従来から多く見られましたが、さかえ小学校ではその取組を、タブレット端末を活用して実施しているとのこと。具体的な手順は、以下のとおりです。

- ①教師は、児童が読む箇所をワードかPDFで文書化し Teams で課題としてアップする。
- ②児童は、家庭で、タブレット端末に音読を録画する。
- ③上手く発音できなかった単語をAIが五つ提示するので、児童はタブレット端末で練習ができる。
- ④児童は、オンライン上で課題を提出する。
- ⑤教師は、児童に対して、コメントでフィードバックを行う。
- ⑥教師のコメント、AIが判定した音読の正解率、一分毎の正解単語数等が児童にフィードバックされる。
- ⑦児童は、再提出を行う。

GIGAスクール構想の推進に伴い、各校でこのような取組も可能となっております。今後、より一層、ICTの効果的かつ効率的な活用に繋がっていきたいと考えております。

